

慈濟

ものがたり

228

慈濟基金會
2015年12月

TZU CHI ● ツーチャー



2015 ● 12

慈濟ものがたり

NOV 228

慈濟基金會

今月の表紙

メナヘル小中学校では難民の子供達がトルコ語とシリアの歴史を学んでいるのは、学業を続ける目的であると同時にトルコ社会に融け込むためでもある。

(撮影・黄世澤)



表見返し●

文・證嚴法師／訳・濟運／撮影・李白士

慎重に正道を歩む

無明が起きた際

すぐに自分を制御できなければ

容易に険しい道に踏み込んでしまいます

わずかにそれただけでも

千里の隔たりを生じ

煩惱に取り憑かれたまま

生死の間をさまよい続けることになります

無明を取り除くには

人々に混じって精進に努めるべきで

諸事を修行の機会ととらえ

迷いの埃を払って

明鏡の智慧を取り戻し

慎重に正道を歩むことです



目次

【世論】 愛は一つの家にある	慈願／訳 4
【清貧から豊かさを得る】 行ー省エネ ❖車の使用を減らす	済運／訳 8
【特別報道・シリア難民】 放浪の末 トルコのシリア難民	済運／訳 22
【人医の愛】 無医村を守る、葉明憲医師	慈願／訳 40
【国際の慈善・マレーシア】 先住民の子供たちに通学の船賃を	済運／訳 50
【證嚴法師のお諭し】 大愛の道を広く世界に 古から変わらぬ長い情の道を	慈願／訳 64
【大地の守護者】 一から十まで行き届いた教育 張新儀	黒川章子／訳 76
【ボランティアスケッチ】 気持ちを切り替えこだわりを捨てる 李瑾萍の軽やかな歩み	黒川由希／訳 86
【納履足跡】 試練や困難を堪える	心嫺／訳 101
慈濟大事記【十一月】	済運／訳 106
慎重に正道を歩む 静思語 慮慰／訳 63	済運／訳 表見返し 裏見返し

愛は一つの家にある

◎ 訳・慈願

自国が気候変動による風災の被害に遭い苦しい時であっても、なお遠方の人禍による災いに関心を寄せるべきだ。国連の統計によると、今年すでに三十四万人の中東と北アフリカの人々が戦禍を逃れヨーロッパへ渡っている。その半数以上がシリア人で、避難の途中で三千人近くが地中海で命を落としたり行方不明になっている。

二〇一一年、シリア民衆は街頭デモを起こして政治改革を要求した。もともと和平活動だったが内戦に発展し、現在までに二十二万人が犠牲になり、四百万人が国外へ難を逃れている。ヨルダン、トルコなどの隣国では近年受け入れたシリア難民の数は百万人以上を超過し、難民支援団体の負担は従来の二倍に増加している。ヨーロッパ諸国は自国の社会や経済への影響を考慮し、救難救助すべきか否か難しい選択を迫られている。

藩基文国連秘書長は、シリアの難民ブームは今や世界最大の人道危機になっていると指摘した。

シリア青年のハーサンと父親は徒歩でトルコに逃げ、ギリシャに密入国するために、全財産をはたいて偽物のパスポートを手に入れ、密航船に乗って逃げのびることができた。身の安全のため、二人は離れ離れになり別々の道を歩き、ドイツで落ち合うことができた。

様々な困難を乗り越えたハーサンは、流浪の期間中に生活物資など世話してくれた慈済ボランティアに、ドイツ語を学び医学を学んで将来自分を収容してくれた国々に貢献したいと抱負を述べた。親子の最大の願いは、いつの日か母親と妹弟を呼び寄せ、再び一家団欒を囲めるようになることだと言う。

このような過酷な境遇にある難民が異郷で安住を得、次世代が教育を受けるためには、諸国の援助が必要である。現在多くの国のボランティアがシリア難民の支援に携わり、生活必需品の支給、語学指導、難民学校建設、施療を行っている。彼らが希望を持って前向きに生きていけるよう励ましている。

次世代の教育を支援するため、トルコの慈済委員胡光中氏とシリア人のジュマ教授は奔走し、今年イスタンブールにメナヘル小学校を開設した。難民の子供が学業に専念し、一家離散の苦しみを少しでも軽減され、未来の夢を実現

できることを願っている。

十月十六日、台湾の慈済ボランティアたちは文房具、玩具、クレヨン、ボールなどをイスタンブールに空輸し、トルコとシリアの慈済ボランティアたちが協力して配付を行った。また、奨学金や生活補助金を千六百人に配付したほか、二千五百世帯の難民家庭に生活物資を贈る予定をしている。

民族の分け隔てなく、異なる宗教が互いに愛をもって交流する中で、シリアの子供たちが笑顔を見せているのを見て、ジュマ教授は「愛は同じ一つの家であり、千万人を受け入れるのですね」と感嘆して言った。

少しずつ寄せ集められた思いやりと祝福によって、紛争がなくなることが祈る。彼らの傷が癒され、さらに彼らの人生が輝き、次世代が憂いのない生活ができるように。



【清貧から豊かさを得る】

◎文・證嚴法師／訳・濟運

その十・行―省エネ

新

聞の報道によれば、台湾に於ける一人当たりの平均的な二酸化炭素排出量はアジアで第一位とのこと（二〇〇五年）。カーボンフットプリントを減らすのに、自分一人ぐらい抜けても関係ない、と思っ

いのです。

カーボンフットプリントはどのようにして発生するのでしょうか？人が住んでいる所なら、どこでも二酸化炭素は排出されます。人が吐く息以外に日常生活での行動によって排出される二酸化炭素が問題なのです。

飛行機や車に乗ると必ず二酸化炭素を排出します。それなのに、たった一人や二人だけでも一台の車を運転すれば、大気が汚染されるのは当然です。

現代の人は余暇を楽しみ、休日には遠出します。至る所で交通渋滞をもたらし、人でいっぱいになります。高い山で雪が降ると、大勢の人が雪見を一目見ようと出かけます。山道は曲がりくねって走りにくい上に、路面が積雪で凍結し、危険極まりありません。



皆がいつせいに山に向かえば、山の下では渋滞を起こして後戻りすることもできず、様々な制約を受けたあぐくに体も疲れ切ってしまいます。そして、一方では車が大量の排気ガスを撒き散らし、ひどく大気を汚染すると同時に、外出すること多くのゴミも出してしまいます。

ですから、私たちは自分の欲望を抑えて質素で純朴な生活を送



り、生活用品も大事に使い、長くもたせるべきです。行動する場合、近い距離なら徒歩か自転車で済ませ、遠い距離の場合は車の乗り合いをしたり、公共の乗り物を使ったりして、個人の車の使用を減らせば、二酸化炭素の排出を削減することができます。

省エネという観念は一人ひとりの暮らしの中で実践されるべきで、皆で地球を護るべきです。

「あなたにできること」

もっと歩き、階段を使おう。

もっと自転車に乗ろう。

車の運転を減らし、公共の乗り物を使ったり車の相乗りをしよう。



車の使用を減らす― 公共交通機関を使い、自家用車は相乗りする―

車は十九世紀に発明され、やがて大量生産されて販売されるようになりました。今では一人に一台という時代です。そこから百年以上が経ち、数多くの汚染と共にエネルギーの消耗も大変なものです。アラブの産油国だけに頼っていきける状態ではなくなっています。

一九六八年からアラスカで油田が採掘されるようになりました。北極圏の第一号油田は氷山にダメージを与えました。本来、北極と南極には地球の自然を保護する作用がありました。しかし、近年、北極、南極の棚氷は

絶えず崩壊を繰り返し、非常に憂慮されます。

地球温暖化の危機に関心を持つ科学者たちが警告を発しています。誰もが次の三つを行動に移せば、エネルギーを節約して二酸化炭素の排出を削減できると呼びかけています。一、肉食しない。二、車の使用を減らす。三、消費を減らす。これは私たちが推進している環境保全と儉





約した生活の理念にぴったり合っているのです。

皆が公共交通機関を使い、二酸化炭素削減の方向で行動すべきです。台湾では交通が発達し、非常に便利になっています。大都市では地下鉄が走っており、誰もがができる限りそれを利用すれば、ガソリンの消費を抑えるだけでなく、時間を節約し交通渋滞を解消になり、遅刻することもなくなります。もちろん、一番重要なのは二酸化炭素の排出を減らせることです。遠くへ行く場合も公共交通機関を選択できます。汽車を使えば走る車の数が減ります。もし、不便な所や辺鄙な場所でも、どうしても車を使う場合は、できるだけ相乗りし、走っている車を一台でも減らせば、排気ガスの排出を減らすことができます。

一人ひとりが「自分の車一台が減るだけでも二酸化炭素の排出削減に貢献できる」という考えを持っていれば、自分の便利のために路上でこれほど多くの車が走ることはないでしょう。公共の乗り物を利用して二酸化炭素の排出削減をすることが最も重要なことなのです。

ここ数年、私たち慈済ではインターネット技術を駆使して、コンピューターで会議をしたり連絡を取り合ったりしています。正月時の挨拶や会議、日常の意見交換など、いつも顔を合わせているのと同じように生活できます。感情のこもった交流ができるだけでなく、車に乗って行き来することも必要なくなりました。

皆ができるだけ公共交通機関を利用すれば、車の使用が減って二酸化炭素の排出が減ります。そして、それに伴った派生的な環境へのダメージも減らすことができます。例えば、駐車場の建設のためにビルの地下の場合



によつては四、五十メートルも掘り下げますが、これも地殻を破壊しているのです。

現に、走っているこれだけの数の車のためにより多くの道路を建設しています。その道路が山を突き抜ける路線であれば、トンネルを掘り、自然と水脈を破壊しています。平地でもコンクリートやアスファルトで地表を覆ってしまい、地表が雨水を吸収したり発散させたりするのを阻害



しています。とくに台湾は台風が多いところで、山道の遮断や橋が流されたり農作物が多大な被害を受けるなど災害がよく報道されています。それらを再建するだけでも大変なことです。道路建設に携わる人は危険を侵して山道や流された橋を修復します。

私たちは普段から災害に備え、大自然を侮ることなく敬意を抱くようじつくり考える必要があります。災害の原因はどこにあるのでしょうか？
現実として、自然は人類の絶え間ない破壊行為にはもう耐えられないのです。何事もほどほどが肝心なのです。経済発展に邁進してきたこの数十年、あまりにも多くの自然破壊が行われてきました。経済の発展と称して、どんな道路を建設し、山を切り開き、大小様々な車が行きかい、地面を痛めつけています。地球はそれに耐えられるのでしょうか？



一旦、山が破壊されると、土壌保全が崩れ、大雨になれば土石流が起きます。また、山からの大量の雨水は河を氾濫させ、農作物に多大な被害をもたらします。これらは全て繋がっているのです。

「人は必ずや天に勝つ」という言葉をよく耳にしますが、実は人の行いが自然の営みを攪乱しているのです。本来、母なる大地は私たちを生み育て、護ってくれるはずでした。地上の万物及び人類の営みによって発生する廃棄物を吸収し、それを養分に転換してまた、万物に与え、五穀を育てる、というようにバランスを取っていました。ところが、人類の欲望が原因で、絶え間なく自然を破壊し、汚染することによって、母なる大地は疲弊しきってしまったのです。これ以上、人類が創造した汚染を大量に吸収することができず、汚染されていない自然の資源を提供することができな

くなったのです。

立て続けに起こる災害を見ていて、人間は何と小さいものかと思ってしまう。世紀の大災難に向かって、よほどの覚悟をしなければならぬでしょう。私はよく「地球が痛がるといけないから、歩く時も軽く足を下ろしなさい」と言ってきました。自然を侮らず地球を愛し、敬虔





な心で自然と向き合わなければなりません。即ち、「地球が傷つくのを見て忍びない」気持ちをもつことです。人は平和であってこそ幸福といえるのです。傲慢になつてはいけません。自然を侮り、欲望のままに過ごしていくことを憂慮しています。

災難をなくすには、一人ひとりの努力が必要です。人類が深く反省してはじめて心の中の不満や対立心、憎しみが消え、自分の中にある清らかな善の性が現れてくるのです。この敬虔で慈悲を持った心と人類間の愛の力だけが、地球の危機を解決できるのです。

「あなたにできること」

□ スマートな運転をしよう：車の急発進や急停止をしない。積載する荷重を減らす。長めの停車をする時はエンジンを切って、ガソリンの消費と排気ガスの排出を減らす。

□ 必要のない時は車に乗らない：もつとインターネットやデジタル会議を利用する。不必要な遠出を減らせば、仕事も楽になり、環境保全にも役立つ。

□ 旅行は近場にするか直行便を使う：旅行は現代人にとって重要なレジャーの一つだが、できる限り公共の交通機関を使い、エネルギーの消費を抑える。海外に出る場合は直行便を選び、二酸化炭素の排出を抑える。

【特別報道】

放浪の末 トルコのシリア難民

長年の内戦で二百万人のシリア人が戦禍を逃れてトルコに避難した。しかし、逃避行は困窮の始まりであり、異境での生活は長期的な試練に直面している。

◎文、撮影・黄世澤／訳・済運

●1人のシリア人難民がトルコ、サルタンガジ市のある市場の一角で祈りを捧げていた。



「私 は家族全員が一緒に暮らせるだけ
でいいのですが、今はそれさえも
かないません」。トルコ・サルタンガジ

市の街角で、痩せた小柄なアマドが憂い
をたたえた目で興奮気味に言った。五人
の子供を抱えた四十三歳のアマドはシリ
ア最大の都市アレppoからトルコのイス
タンブールに避難してきて二年が経つ。
避難当時、仲介業者は一人当たり千五百
米ドルの報酬を受け取る代わりに、最終
的に一家七人をドイツにいる姉の所に送
り届けるはずだったが、トルコに着いて
お金を受け取ると姿をくらましてしまっ
た。アマドは仕方なく残ったお金でまづ

四人の子供をドイツに送り、自分と妻、
末の娘の三人がイスタンブールに残って
もう一人の姉の所に身を寄せている。

私たちが会ったその日、彼は家族と一
緒に支援物資を受け取りに来た。戦火の
下にある故郷や避難の道中に話が及ぶ
と、皆、当時の悪夢が蘇ったように不安
な眼差しになった。全員の記念写真を撮
ろうと提案すると、アマド以外は無理し
ながらも笑顔を浮かべてくれた。それは
彼にとって永遠に家族写真と呼べるもの
ではないのかもしれない。

押し寄せる難民がトルコ社会を揺 さぶる

トルコにはアマドと同じように戦禍を
逃れて来たシリア人難民が二百万人い
る。人口がわずか六十万人のサルタンガ
ジ市だけでも十万人近いシリア人難民が
いる。現地の主な産業は伝統的な家内工
業的な靴の製造や縫製で、非正規の違法

●アレppoから来たアマド一家は歩いて物資を受け
取りに来た。4人の子供を先にドイツに渡らせるた
めに彼は貯蓄を使い果たした。今はイスタンブール
で懸命に生計を立てながら、いつか一家が揃うこと
を願っている。

労働に就けるチャンスが比較的多いため、難民が多く集まるのである。慈済基金会と協力しているジュマ教授もその住民で、それもあって、そこが物資配付の重点地区になっている。

二〇一一年にシリアで内戦が勃発して以来、二十万人が死亡し、四百万人が故郷を離れ難民となっている。トルコと隣接したシリアの間には隔てる海はなく、地理的な条件から難民がヨーロッパに渡る前の飛び板的な場所になっている。それ故、内戦勃発以来、絶えずシリア人難民が流入しているのである。

トルコはこれまでに難民関係に費やし

た経費は四十五億ドルに上り、近隣中東各国よりも設備が整った難民キャンプを二十二カ所も建設してきた。

トルコ人もシリア人もイスラム教を信仰しているが、アラビア文化を根源に持つシリア人はトルコ人とは数多くの点で異なっている。最大の問題は言葉が通じないために様々な摩擦が起きることである。

トルコが傷ついた隣人に援助の手を差し伸べるのは人道的な観点からであるが、押し寄せる難民がもたらす派生的な問題は大きくなる一方である。その一例は、国境沿いに流れ込んだ難民の数が現

地の人口をすでに超えていることである。トルコの法律では許可のない外国人は仕事に就けないことになっているが、

実際は本腰を据えて取り締まりを強化してはいない。そうとはいっても、違法に仕事をしているシリア人難民は労働保険を

取得することができない上、労働時間が非常に長い。難民の数が増え続ける中、トルコは財政面で試練に直面している。大量の難民は大きな労働力には違いないが、現地の



● 難民は身分証明書を提示して米と小麦粉などの差し迫った物資を受け取っていた。



● 慈済基金会はサルタンガジ市野菜市場で物資の配付活動を行った。入り口は日用品を受け取りに来た難民でひしめきあった

労働市場に直接影響を及ぼしている。トルコ人の月額最低賃金は二千リラ（約八万五千円）であるが、シリア人難民を七百里ラから千三百リラで雇っている工場もあり、賃金の安いシリア人を雇って現地人の失業率を上げる結果となっている。また、仕事を見つけれない難民は路上で物乞いになるため、

より大きな社会問題になっている。

この他、EU各国の難民政策もトルコに影響を与えている。国連難民高等弁務室の資料によると、二〇一五年九月までに約四十万人のシリア人がEU二十八カ国に亡命の申請をしている。ドイツのメルケル首相のように公に各国に対して難民の受け入れを促している国もあるが、第二次大戦以来最大の難民危機に直面し

影響を及ぼすことを懸念している。ハンガリーのような後からEUに加盟した国は、国境を閉鎖して新たな難民の流入を防いでいる。

もし、EU各国がシリア人難民の受け入れを拒否するようなことになれば、トルコに滞在している難民はトルコ社会により大きな衝撃を与えることになるだろう。

厳しい生活を強いられる難民

千年以上も前から交易の要所であったイスタンブールの繁華街は、世界各地の観光客を魅了してきた。ヨーロッパとアジアにまたがる地理的条件によって、この都市は融合した文明の光を放ってきたが、その偉大な建築物から路上に目を移すと、常に子供連れの難民一家が路上生活をしていたり、物乞いしているのが目につく。

私たちはスハラの後について街を通り抜け、家賃が月八百リラ（約三万五千元）のこじんまりとしたアパートに着いた。

以前はシリアで服飾デザイナーをしていたスハラは、五カ月前にアレップからイスタンブールに密入国して来た時の服をいまだに着ていた。末の息子アダハジが人見知りしながらも彼女の側で避難して来た時に持ってきた玩具で遊んでいた。物静かな彼女は、シリアでは心配のない生活を送っていたが、今は夫と長男が工場で月給千八百リラの仕事しながら貧しい生活を送っている。

モハメッド・フセイン一家は細長い小さな応接室に私たちを迎え入れた。彼は以前、脊椎を損傷したために働くことができず、仕方なく十三歳と十一歳の子供

を働かせている。「長男は仕事から帰ってくると、疲れてそのままソファで眠ってしまったたり、ストレスのあまり大声で叫ぶ時があります」。モハメッドは可哀想には思うが、どうにもならない。

慈済基金会のトルコでの支援

●慈済基金会のトルコでの支援は1999年の大地震に始まった。その年の8月、トルコ北西部でマグニチュード7.4の地震が起き、死者が1万7千人に達し、50万世帯の人が住む家をなくした。慈済基金会はイスタンブールで被害状況を調査すると共に物資の配付を行った。

2002年1月、慈済基金會はトルコのゴジエ市にある大愛村で配付活動を行った。子供がはにかみながらカメラに向かって手を振った。





●メナヘル小中学校で始業式が行われ、生徒が整列して教室に入るのを待っていた。

「シリア人の子供は学校に行くことができなかったら、街で物乞いするか、未成年労働者になって一日に十二時間労働の仕事に就くしかありません。それは将来、トルコの大きな社会問題になるでしょう」と台湾駐トルコ事務所代表の鄭泰祥氏が言った。「難民の子供たちは教育を受けて状況を好転させることができなかったら、永遠に社会のどん底で暮らすマイノリティーになってしまうでしょう。トルコ全域で約三十万人のシリア人難民の

子供が教育を受けられないでいます。イスタンブールだけでも六万六千人ほどおり、彼らは家計の必要性に迫られて外に出て働いているのです」

学費支援計画で希望が見えてきた

トルコ人はシリア人難民のことをどのように見ているのだろうか？ 私はイスタンブールのメナヘル小中学校の前で子供を学校に送ってきたトルコ人のアリにこの問題を聞いてみた。「私たちは皆、兄弟であり、互いに助け合うのは当たり前のことです」と彼は平然と言った。

午後二時半、太陽は眩しかったが暑いほどではなかった。メナヘル小中学校第一校区のトルコ人生徒たちがスクールバスに向かって走って行った。一番楽しい時刻である。校庭のもう一方には六百人近い生徒が隊列を作って整列し、同じ教室で授業を受けるために入る準備をしていた。午前中はトルコの伝統的なコーラン経学校であり、午後はシリア人の子供たちに教育を受けさせる場として提供している。

台湾慈濟基金会の支援とイスタンブール市政府の協力の下に、二〇一五年初頭から難民の子供たちのために二つの学校

● 少なからぬシリア人は慈済の支援を受けた後、配付活動会場でボランティアとして配付物資の整理を手伝った。言葉は違っても、彼らは台湾からの善意と情熱を感じ取っていた。



を立ち上げた。すでに千六百人の生徒がここでトルコ語、シリア語、歴史などを勉強している。

十二歳のアハアは父親が他界し、兄も戦争で亡くなった。一家は母親ともう一人の兄の三人だけだ。慈済の学費支援計画に参加する前、彼は家計を助けるために仕事をしていたが、やっと学生の身分に戻り、今は六年生である。彼の同級生であるアヤは二年間働いていて、縫製工場で働いている父親と共に家計を背負ってきた。慈済の学費支援計画は学費を支援するだけではなく、一月三百から八百リラの生活補助金を出して、勉学によつ

て家計に影響が出ないようにしている。

十月十七日の朝、アルナヴトコイ市立駐車場の外は物資の配付を待つ難民であふれ返った。慈済基金会は二〇一四年から大規模な物資の配付活動を続けて来ているが、消息が広まるにつれ、物資を受け取りに来る人は毎回増え続けている。

各国は難民と共存する試練に立たされている

難民は経済成長の力になれる一方、国を破綻させる可能性も秘めている。しかし、彼らの困窮した状況は数字だけで解

● 「私は毎月借金して生活するしかありません」。名前を明かしてくれなかった女性は2人の娘と家賃600リラの小さいアパートに住んでいるが、それ以上に出費を減らしたいと思っている。シリア人難民が増えるにつれて借家の需要が増加し、サルタンガジ市の家賃は上昇を続けている。それを負担できない数多くの難民は他に移るしかなく、引越する度に小さくなり、家賃は高くなる。





学校に戻る願望

●（左頁上）スハラは長男の写真を手に持って、爆弾が故郷に落ちて来た時の様子を語った。以前、シリアで不自由のない生活をしていた彼女は教育の大切さを知っている。彼女は学校に行けず、働いている長男が再び高校に通えるようになることを願っている。

●（左頁下）42歳のナバフは80歳の父親と9歳の息子を連れて、別の地区から一時間半かけて物資を受け取りに来た。一家9人はトルコに来て1年半になる。今のところ仕事は安定しているが、息子は学校には行っていない。「学校に行くべきですが、行かせられないのです。また、妻は足を怪我して手術しなければなりません。どうしたらいいかわかりません」。ナバフはアラーに感謝すると同時にあきらめたような口調で言った。

●（右頁）モハメッド・フセイン一家は細長い小さな応接間に集まった。2人の子供は働かなければならなかったが、慈済の学費支援計画に参加してから、やっと工場を離れ、学校に戻ることができた。

● 慈済ボランティアは朝日が射す中、
難民の家を訪問し、彼らのニーズを理
解して最適な支援をしようとしている。

決できることではなく、国境を
越えてやって来る数字の中の一
人ひとりが生身の人間であり、
一つひとつの家庭の移動なの
だ。

難民を受け入れるトルコとE
U各国にとって、難民政策は大
きな賭けのようなものである。
しかし、先の長い人生を歩み始
めたばかりで、遠く故郷を追わ



れたシリア難民の子供たちにとっては、
他人の学校を借りて授業を受け、放課後
も字を書く練習に励まなくてはならない
が、人生の希望はここから始まると同時
に、知識だけが彼らの境遇を変えてくれ
る唯一のものである。

慈済の支援チームがサルタンガジ市で
物資の配付をしていたのと同じくし
て、ドイツのメルケル首相がイスタンブ
ールでトルコの首相に会い、押し寄せる
難民の解決策を話し合っていた。EU各

国は大量の難民がヨーロッパに流入する
のを抑えるために、三十四億ユーロを抛
出してトルコを支援することを首脳会談
で合意した。それと共に、トルコのEU加
盟を加速すると同時に、トルコ国民のE
Uへのビザをなくすことで、難民をトル
コに留まらせる案が検討されている。難
民が自力で必死に生活する一方で、彼ら
の運命は大国間の政治的な駆け引きに左
右されようとしている。

無医村を守る

葉明憲医師

曾文ダム付近にある大埔医療所は、台湾一赤字の巡回医療所。十二年間、漢方医の葉明憲医師は山間部での医療に従事してきた。これまでに往診で回った距離は地球4周分にもなる。

山に囲まれ風光明媚な碧色みどりの水辺には、病に苦しむ人たちがひっそりと暮らしている。

◎文・何姿儀／訳・慈願



(撮影・謝明芳)

生まれつき立つ力の弱い吟淑がまた転び、母親の林鳳為は吟淑を連れて慈済大埔医療所は駆け込んだ。鳳為はポケットから心臓病の薬「救心」を取り出して飲み込んだ。

二、三度深呼吸をして目頭に涙を浮かべ、「この子を私より先に死なせないで……」と訴えた。障害を持つ子の親の心からの悲痛な言葉だった。孤立無援の時、彼女の足は大埔医療所に向かう。ここには安らかな心のもとどころがあったからだ。

吟淑は生まれた時、重度脳性麻痺と脊髄小脳変性症の合併症があつて、真つす

ぐに立つことができず、歩く時はふらふらして、言葉もはつきり発せられない。もともと裕福ではない暮らしに、吟淑の病は重くのしかかった。

嘲笑、批判、偏見の目に耐え、歩行不全によって転ぶ度にできる傷跡を見ては涙した。娘が生きる道を見出せることを願っていた。

嘉義県大埔郷は山々に囲まれた風光明媚な土地だが、ここに住む人の生存条件は厳しいものである。財産もない林鳳為は家計を維持するためあらゆる仕事をかけもちし、夫は農務のかたわら道路補修工事現場や建築現場の作業員として働

き、夫婦は休む間もなかった。黒く日焼けした顔や手、疲労による全身の痛みや慢性病など、山に住む人たちは必然のものと受け止めている。

林鳳為は将来を思って、南部の屏東にある障害者特別学校に娘を入学させた。片時も離れずにいた娘を遠くに送ったことは身を切られるほど辛いことだった。

吟淑は山地に住む人にとって当然の苦労をまた自分自身も経験してきた。努力して専門学校を卒業したが、身体と言葉に障害があり、職に就くことができなかった。障害者として冷たい仕打ちを受けたのち、唯一残された道は故郷に帰る以

外になかった。

吟淑の栄養不足を気にかけて、葉明憲医師が山へ行くリハビリ師に託して栄養品を渡していることに、林鳳為は感動していた。葉医師が関心を寄せていたのは彼女一人だけでなく、診療時間が終わっても患者を断ったことはなく、山の上に重症患者がいると自分から出向いて治療し、患者の一日も早い回復を願っていた。

通信回診によって両方の患者を護る

この辺りはたけのこの産地で、少なからずの外貨を得ている反面、この厳しい

農務や収穫は大埔郷の農民にとって大きな圧力になっている。阿恵さんはナイフの反復作業によって腰を痛めたが、サポーターをつけながら生活のため仕事を続けてきた。大埔診療所で葉医師の針灸とリハビリの治療を受けて、十年来手放せなかったサポーターをつけなくても作業ができるようになった。

二〇〇七年、大林慈濟病院と嘉義県衛生局が提携して山で健康検査を行った。

●大埔郷の林鳳為（左）と娘の吟淑（中）。重度障害者の吟淑は葉明憲医師の細心ケアでだんだん健康になり、家族のように付き合っている。（撮影・黄小娟）



この時、林俊龍院長が林鳳為の心臓閉塞を見つけて、即刻治療を始めた。

当時、大林慈済病院の専門医チームが大埔診療所の後ろ盾になって、遠隔地への回診を行い、村民は遠くの病院まで行く時間が省けて、林鳳為の心臓と血圧は平常値を保つことができた。医師、看護師、リハビリ師は彼らが頼りにする人たちであり、友達でもある。

村人が困っている時に大埔診療所へ行くと、葉医師やスタッフは彼らの苦しみ
に耳を傾け、やさしく寄り添って励ます。
林鳳為もどんな苦労も診療所の愛に慰め
られていると言う。

この世から取り残されたような大埔診療所

広大な曾文ダムは台湾最大の貯水量を有し、嘉南平原に多大な恩恵をもたらしている。しかし貯水池の近くに位置する大埔郷は数十年来、黙々と平野部に発達と繁栄をもたらしているにもかかわらず、山地の大埔郷は何の恩恵も受けていない。

以前ダムの下方にはぎやかな街があったが、水位の上昇に従って大埔の人たちはこの地に移転してきた。水源保護区には工業はなく、建設も許されず、満天

●大埔衛生所は大林慈済病院の付設診療所で、西洋医、東洋医、歯科医が急性病や慢性病の治療に当たっている。専門医師による遠隔諮問回診は患者にとっても便利だ。（撮影・謝明芳）



の星の下に孤立した寒村の風光明媚は都会人のあこがれの地だが、若者や医師はここにとどまらない。

かつて政府は大埔郷に診療所を開設したが、長くは続かなかった。一九九六年に再び診療所をオープンする予定だったが、来る医師がいなかった。その後、二〇〇二年に大林慈済病院が引き受けてから、内科の林繁幸医師が駐在し、漢方医の葉明憲医師が毎週診察に行くようになった。

曲がりくねった台三号線の山道は大雨になると、土砂崩れで大雨の度に復旧工事を繰り返している。この道は大埔郷の

人たちが外へ出る唯一の道である。十年以上も葉明憲医師は堅い意志を持って山地での医療奉仕を行ってきた。

「私は大埔の山水風景に魅せられた」と言う葉医師に、大埔との因縁を聞くと何のためらいもなく、「すべてが当たり前のことですよ」と言う。

実習医の頃、慈済人医会の大埔郷の施療に参加していた時、曲がりくねった山道に車酔いする人もいたが、彼は窓外の景色に見とれていた。そして、大林慈済病院が大埔診療所に漢方部門を開設すると勇躍志願した。

大林の市街を出発して、中埔、番路を

経て大埔まで車で往復三時間以上はかかる。二〇〇七年の夏、豪雨の後大きな山崩れがあった。そこを運転していた葉医師は、ぬかるみに車輪が滑って、ハンド

ルを切り返した途端山壁の脇の溝に落ちた。救いを求めようにも携帯電話は通じず、途方にくれていた時、大埔衛生所の看護師がそれを知ってクレーン車に連絡してくれた。そしてかけつけたクレーン車の運転手が慈済ボランティア陳励華の息子だった。

長年陳励華の夫は脳卒中で、気管支に管を入れる必要があったが、健康保険の制限によって病院を転々と変えなければ

●大埔人口の老化にともなって、大林慈済病院は毎年大埔医療所で健康検査を行い、早期発見によって健康を護っている。（撮影・鄭舜銘）



ならなかった。一年前、陳励華は夫を大埔へ連れて帰り、葉医師は毎日診察を終えてから彼の家へ出向いて鍼灸治療を施し、今では体と精神状態が大分回復している。

**路は切れても情は切れず
責任は未だ終わっていない**

約一年前、治療にきた患者が葉医師に車の運転に気をつけるように注意をしたが気に止めなかった。それからしばらくして山道の大きなカーブで向かい側から突然大型トラックが現れ、ブレーキを踏

む間もなく、あつという間にすれ違った。幸い大事に至らずサイドミラーが壊れただけだった。

彼は気が静まってから考えた。すべてに暗黙の加護があったから大事に至らなかったのだと。山の人たちが自分が必要としているからで、それに自分もこの地の人たちのおかげで幸福でいられるのだと思った。

十二年来、唯一休診したのは風災後重大な山崩れで交通が遮断された時だった。大埔診療所の診察から患者の往診に車を走らせた道のりは実に地球四周分にも相当する。彼が常に思っていることは、

「私が車を走らせれば患者が出てこなくてもよい」ということだ。

寒村では能力のある人は生活のために忙しく働いている。バスもなく、行動が不自由な人や年寄りには診療所まで一人で歩いてこなければならぬ。ある年寄りは傷ついた足を引きずって六キロの道を歩いて診療所まで来た。そんな村人たちの苦勞を見かねて彼は奔走している。

「この診療所で質の高い治療はできませんが、村人は喜んでくれます」と。医師と患者が互いに思いやっているのが、大埔診療所運営の特色だ。

健康保険署が大埔診療所の漢方科に支

払う金額は実際の半分程度で、その往診の頻度の多さに健康保険署の検査員は驚き、全国一の赤字診療所とのレッテルをはられた。今まで何の憂いもなく山村に貢献できたのは、ひとえに大林慈済病院の支持があったからだ。

十二年間ケアしてきたお年寄りがさらに老いている今、自分の責任はまだ果たされていない。村人たちに必要とされていることが活力を与えている。「私は彼らのケアをしていると言いますが、その実は私は彼らの世話になっているのです」と。

● 山水に囲まれた風光明媚な大埔郷で、葉明憲医師は12年間温かい人情に触れ、盤石の使命をもって施療に従事してきた。(撮影・千剣興)



先住民の子供たちに通学の船賃を

サバ州の辺境地パイタンの先住民の子供たちは何もかも不足していた。
カバン、文房具、交通費など…。

しかし、彼らは学習への情熱に満ち、自分たちの将来を担っている。



パイタンに数え切れないほど行き来しているが、毎日が試練である。早朝五時過ぎ、ボランテシアの陳彩媚と謝

秀華一行はサンダカンを出発し、平坦なアスファルトの道路からヤシ園の砂利道を通って山道を登り、四時間かけてやっとパイタン村河畔の小さな船着き場に着いた。そして、救命胴衣をつけて日

●パイタン村の先住民の子供の多くがビニール袋に本を入れて学校に通っていた。慈済からカバンをもらった時、それを高々と掲げて喜び、感謝した。（写真の提供／サンダカン支部）

よけ帽子をかぶり、ボートに乗って水の流れる方向に進んだ。行き先は慈済が交通費や食事代及び補習授業料を支援している三つの学校である。

行く途中、救命胴衣をつけていない大人や子供たちが完全装備してボートに乗っているボランテアたちを好奇の眼差しで見た。

「私は泳げないので、初めてこういうボートに乗った時、とても怖かったのです」。救命胴衣と雨合羽、日よけ帽子を携帯してきた陳彩媚が言った。「水がボートに入ってくると、ボートが沈むのではないかと怖くて、一緒に水の汲み出しをし

ました」

サバ州サンダカン市から二百二十キロ離れた偏境地パイタンの主な住民は先住民である。山道を行くのが大変なため、サンパンに似たモーター付きの細長いボートが村人にとって最も便利な交通手段である。農業と出稼ぎで生活している先住民の多くは生活が貧しく、子供を学校に行かせるためのボート代も払えないことがよくある。

「パイタンでは毎日、学校に通うことは容易なことではないのです。子供たちは山奥や川沿いの村に住んでおり、学校とかなり離れています。学校へはバスや車

の便はなく、ボートに乗るお金がなければ、歩くしかないのです」

慈済サンダカン支部の責任者である謝秀華によると、二〇〇四年にボランテアはパイタンを訪れ、先住民への施療を始めた。数年後、パイタン一帯の山林が開発されてヤシ園に変わり、泥道ばかり

●パイタンの多くの村では生活を水路に依存しており、ボートが主な交通手段である。多くの貧困家庭の子供は慈済が補助した交通費でやっとボートで通学できるようになった。ボートは沿岸沿いに様々な年齢の生徒を乗せて行く。屋根のないボートでは日光や雨にさらされるが、ぎっしりと乗り込んだ生徒たちは苦に思わず、逆に学校に行けることに感謝している。（撮影・謝秀華）



になったため、子供達は何時間もかけて学校に行かなければならなくなった、と校長先生や教師たちが語る。雨の日になると歩行が一層難しくなり、学校に着いた時はすでに下校時間になっていたこともある。そういうわけで、欠席率が高くなった。

学校に行けない状況を見かねて、二〇一〇年、ボランティアたちはパイタンにある全ての小中学校を訪ねてから課外補習の支援を始め、今日まで三千五百人の子供を支援してきた。二〇一四年からはボランティアがパイタンのそれぞれの学校と子供たちの家庭を訪問して調査

を行い、「幸福な学校生活」と題した支援活動を開始した。それは支援を必要とする子供にボート代や補習授業料、食費を補助するものである。

ボートから希望が見える

九月半ばのある日、ボランティアがシパンガン小学校の船着き場に着了いた時、近隣の中学校はすでに下校して生徒たちが船着き場に集まり、小学生の下校を待っていた。

中学三年生のダニューには小学一年生の妹がおり、家は学校からボートで二十

分の所にある。慈済がまだ交通費を支援していなかった時、彼は週に二日しかボートに乗れず、他の日は学校へ行けなかった。

彼の父親は水道局に勤めているが、給料は多くない。母親は家で幼い弟や妹の面倒を見るために働けず、子供たちが毎日ボートで往復する一・八リンギ（約五十円）が払えなかった。勉強が好きなダニ

●サンダカンからパイタンまで車で4時間かかる。ボランティアはこの11年間、施療と物資の配付や教育補助を行ってきた。教師、生徒、村人とも知り合い、親しい家族のようになった。（写真の提供／サンダカン支部）



●生徒は慈済からもらったカバンに本やノートを丁寧に入れる。カバンは重くなつたが、勉学する喜びに満ちていた。（撮影・陳金香）

ユーは将来技術者になりたいと思っているが、続けて学校に行けなければ、その夢は断たれてしまう。

「今、僕も妹も毎日学校に行けるようになりました。とても幸せです。以前、僕は成績があまり良くなかったのですが、今年はクラスで十番以内に入っています



す」とダニユーははにかんで言った。毎日夜が明ける前に船着き場に行つてボートを待つが、雨の日になると体が濡れ、生徒でいっぱいになったボートの中では足を伸ばす空間もないほどになるが、彼にとっては勉強できるだけでよく、これぐらいのことはどうということはない。

ボートが着いて子供たちが降りると、往々にして道はぬかるんでおり、そこかしばらく歩かないと家に着かない。ボランティアはボートから降りると、ぬかるんだ道は普段よりも歩くのが大変で、木につかまったり互いに支え合ったりしながら坂道を上った。それによってボラ

ンティアは子供たちの苦勞を感じ取ることができた。しかし、子供たちの屈託のない笑顔は、彼らが全く苦勞とは思っておらず、勉強できるのだからとても幸せだ、と言っているようだ。

カバンを持てば、毎日が楽しい

新芽助成金（補習）を申請する子供は年々増え、パイタンの十幾つもの村に渡っている。謝秀華と他のボランティアは子供たちが直面している困難をよりよく理解するため、苦勞を厭わず、一戸一戸家庭訪問をしている。

「子供たちは文房具が不足しています。

校長先生からの依頼により、毎年の新芽クラスで支給するのは現金ではなく、もっと必要な鉛筆や定規、練習ノート、制服などにはしています。これら文房具などの物資は生徒たちに大きな希望をもたらしています」と長年当地を訪問して来た謝秀華には感慨深く、カバンの支給で生徒たちの単純な必要性を感じ取った。

今年初め、新芽助成金支給が迫っていた時、謝秀華はリサイクルセンターで多くのジーンズが集められてあったのを見かけ、パイタンの生徒たちが皆、ビニール袋に教科書を入れて学校に通い、時に

はそれが破れて本が落ちていたことを思い出した。そこで、彼女は裁縫を得意とするボランティアに頼んでジーンズでカバンを作ってもらい、支給日に贈ることにした。

しかし、謝秀華が用事で台湾に帰っていた時、サンダカンのボランティアから電話で助けを求めにきた。今年は新芽助成金を申請した生徒が五百人ほどにふくれ上がったため、ジーンズが不足してカバンが間に合わない、という内容だった。彼女は静思書軒の売り場で見かけた紺色の手提げバッグがカバンの代わりにならないものかと考えた。しかし、在庫が足

りなかったため、まず四百個をサンダカんに送った。

「四百個の慈済バッグとジーンズでできたカバンを合わせれば、新芽助成金を受ける生徒たちには足りるのですが、思いもよらず、ほかの学校からもカバンの要求が来たのです。数量が足りないのので来年支給しますと返事しました」

パイタンで支給する時、生徒たちは大きさも色もさまざまなカバンを背負って大喜びだったが、慈済のバッグをもらった小学生たちも顔をほころばせた。臨時に申請した幾人かの生徒たちだけは文房具をもらっただけで、カバンはもらえな

かったため、悲しそうだった。謝秀華たちはそれを見て心を痛めた。サンダカンに戻ってから、ボランティアたちは「生徒一人にカバン一つ、善人一人がカバン一つ」運動を起こし、身近な親戚、友人などからカバンを募った。その結果、短期間に千個ものカバンが集まった。

次の新芽助成金の支給時には一人につき一つのカバンを支給することができ、二度と子供たちを失望させることはないだろう。謝秀華たちに笑顔がこぼれ、先住民の子供たちに対する人々の愛を感じた。

●パイタンの生徒の中には家が遠いため、寄宿する子供もいる。慈済は長期的に食費と補習授業料を補助している。ボランティアが寄宿舎を訪問した時、生徒たちは手をふって感謝の気持ちを伝えてくれた。（撮影・謝秀華）

教師も生徒も一所懸命励む姿が一番美しい

長年、ボランティアが子供たちを世話してきたことはパイタンの校長先生を感動させた。セコラ・ケバンサン・ルバン・ブアや小学校のダスニ校長によると、二〇〇八年にダンロンリベで教鞭を取っていた時に慈済と知り合い、毎年、ボラ

ンティアがノートや辞書などの文房具類の物資を提供してくれていた。そして、山奥に住む生徒たちが通学するために自転車まで提供してもらった。今の学校に転勤してからも、慈済は寄宿生の食費や補習授業料を提供し、成績の良くない子供たちも補習に参加できるようにしている。

「これによって生徒たちの成績は大きく向上しています。中でも学習障害があった六年生の十人は、公の模擬試験に合格し、そのうちの二人はAを五つも取ったのです。この学校では今までこんなに素晴らしい成績を残した生徒はいませんで



した」。ダスニ校長から見ると、慈済ボランティアは生徒たちにとって正真正銘の恩人である。パイタンは観光客を引きつける風光明媚な所ではないのに、ボランティアたちは車とボートを乗り継いで、苦勞をいとわず寄宿生と補習生の世話をしに来てくれる。その志は彼に深い感動を与えた。彼は慈済の会員になり、毎月の寄付で困っている人を助けている。

謝秀華がたどたどしいマレー語で教科書を読み出すと、子供たちは声に出して笑った。言葉は通じなくても、その真心は感じ取ってくれている。子供達の成績に向上が見られることはボランティアに

とって一番の喜びであると共に、彼らが大事に慈済のカバンを使っていることに心を打たれる。慈済のカバンは事実使いやすく、生徒たちも大いに気に入っており、教科書を忘れてくることもなくなった、とダスニ校長が笑顔で言った。

一人の生徒がカバンを開けて、謝秀華に整理された本やノートを見せ、小さい声で言った。「本がたくさん入るので、とてもいいカバンです」

子供たちはジッパーをしめ、背中に背負ったカバンは本がいっぱい入って重いのだが、皆笑いながら教室を出て行った。ボートで帰る生徒は船着き場に行き、寄

宿生はカバンを背負って宿舎に向かった。ボランティアは一緒にいて行き、住環境が簡素であることを知ったが、生徒たちが苦にしている様子はなかった。

寄宿生はカバンを下ろすと、デッキに出てきた。ボランティアが訪問を終えて帰るので、彼らは高い位置にあるデッキで見送るために出てきたのだ。ボランティアは皆に手をふり、勉強するんだよと声をかけた。生徒たちは輝くような笑顔で答えてくれた。その純真な笑顔に希望が見えた。

■ 静思語

【正しい道を歩むべし】

人は正しい道を歩まねばならない。正しい道を歩まずに悪い道ばかり歩む人は、足のない人よりも悲惨である。



恐怖、苦痛、恩讐は

人心に悪に種を繁らせ

世界に無尽の災難をもたらす

情を長くして大愛を拡げ

人心に愛の種を撒いて

この世に希望の花を咲かせよう



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願／絵・林淑女

大愛の道を広く世界に
古より変わらぬ長い情の道を

シリア内戦が勃発して四年。これまで約四百万人が故郷を後に逃げ出しています。彼ら難民は、風雪の中を荷物を背負い、幼子を抱いて長い泥道を歩き、途中少なからずの人たちが命を落としています。たとえ苦勞のすえに他国へ辿り着いても、その門が閉ざされていること
もしばしばです。

人がもたらした禍の苦しみを見るに忍びません。ヨルダン、トルコ、ドイツの慈濟人は長期にわたってシリアの難民に物資や医療を提供し、子供の教育に関心を寄せ世話をしています。奉仕の時には宗教や民族の壁を取り払って、相手

を尊重し誠意をもっていたわり、この世にも温かい愛のあることを実感させています。

トルコでは百万人以上のシリア難民を収容していますが、労働の場を提供することができません。そこで多くの難民家庭では子供たちがアルバイトすることによってやっと一家の生計を維持しており、過酷な生活を送っています。難民児童は残酷な戦争によって祖国を後にしなければならず、異国で過酷な労働の試練に直面しています。彼らは精神的な苦痛を強いられており、もしも恐怖や苦痛、恨みの種が心に植えつけられ

ば、その将来を憂慮させられます。

トルコの慈済ボランティアとトルコ政府、そしてシリアの知識人は協力して、難民児童が学校に戻り、教育によって彼らが恨みや復讐心をなくし明るい世界に向かっていくことを願っています。さらに彼らの心田に愛と善の種をまくことができるように願っています。

時間、空間、人間の「三間」には、人と人との情だけをとどめることができます。この世の平和平安にとって「誠」はなくてはならないものです。ですから「誠の情誼はこの世の吉兆である」ということができます。

今年の年末祝賀会を催すにあたり、私たちは「大愛の道を世界に向けて広げ、情の道を長く古から今に至るまでつなげよう」を来年のテーマとすることにしました。慈済が設立してから五十年来、九十二カ国に慈善活動の足跡を残してきました。世界中で天災と人災が頻発しているこの時代に、大愛の情を長く持続的に展開し、慈悲と智慧を以て精進し、苦難の人々を助けていかねばなりません。

毎年行われている「海外委員研修会・慈誠精神研修会」が、十一月七日から二十四日まで開催され、三十カ国以上

の慈済人が参加しました。そのうちの千七百人は現地ですでに慈済委員や慈誠の見習い訓練を終えており、今回台湾で認証を受けました。

台湾の委員たちは、世界各地で愛の奉仕をしている人たちがはるばる帰ってきたことに感謝し、喜んでおもてなしをしていました。帰ってきた海外の人たちも、細やかな誠意に満ちたもてなしに応え、お互いの間には感謝と尊重の愛がありました。

海外や本国の慈済人の発心因縁はそれぞれ異なっていますが、仏縁と私との子弟縁にいささかも変わりはありません。

ん。慈済の大家庭の中で皆は「仏の心を以て師の志を己の志とする」という志を抱き、仏と同等の広い心、何物にも染まらない清らかな大愛を以て、師の志願を実践し、天下の苦難の人々に抜苦与楽をしています。そして、人々は明るい大道へと導かれ、なお正しい方向へと邁進しています。

人々はみな清らかな本性を持っていますが、一念がずれてしまうと分別心がなくなるのは真に惜しいことです。そして貪欲な愛、対立、仇や恨みはこの世にさまざまな禍をもたらしています。慈済は「仏教のために、衆生のために」の

志をもつて、半世紀以来「人心の浄化」「愛の心の啓発」に終始一貫努めてまいりました。それは社会や人心の安定と、人間に平和を促す重要な力でもあるのです。

日々善の心を起こし
時事善事を行い

無明の雑草を刈り取って
悪に影響を受けないように

人々は皆仏と同等の清らかな本性を持っていますが、残念なことに幾世も無明に染まっていたために、煩惱が複製さ

れて良からぬ習気が成長して、世界が堪忍世界となりそれが絶え間ない苦しみとなっているのです。

心根が乾燥していると、少しの風にも砂塵が舞い上がり、暗く覆います。しかし精進法を聴くと、内心にまで吸収した法の一滴滴が、心を潤して清い本性に立ち返って少しのそよ風にも砂塵は舞い上がりません。

仏陀のお教えに「諸悪を作るなかれ、衆善を奉行せよ」とあります。その実、皆にはそれができるのです。それは善念を培う所から始めて、日々善の心を起こし常に善を行えばそれだけでいいので

す。善行の習慣があれば、悪習にしばらく、毎日が楽しく自在になります。

一般の人は自分の好きな物を見つけると、欲念を起こして自分の物にしたがるために、消費の習気になります。また口欲を満たすために惜しげもなく、動物の命を犠牲にします。それには、わずかも不善を取り除くことから始めて、愛欲を節制し、食らず、口欲を野放しにせず生きとし生くるものの命を尊重することです。人、事、物に対して意にならなくても忍べば、大空のように心が広々とし、ますます。さらに進んで、愛を必要とする人に分け与え、布施をすることです。

要するに善の種を心にまくと雑念は生じません。もしも角つき合えば心は晴れ晴れとせず、自分が造った無明煩惱の業力に自分を困らせるだけです。善法を心に取り入れ、日々善事を行うと心身ともに安らかになります。無名の雑草が心田にはびこらせないように護ると慧命はすこやかに成長します。

一切の煩惱を消滅し

広く一切の衆生を済度し

初発心を永久に持ち続け

菩提の大道は真つすぐに

《法句譬喻經》に記載されています。

仏陀が靈鷲山でお経の講釈をされていた時、一人が前に出て、出家して修行したいと言いました。仏陀が「なぜ修行するのか」と聞くと、「家では妻と子のために生涯忙しく、気がかりがなくても苦しいのです。仏に私の出家をお願いして、世間の真理を体得して仏法を大衆に広めたいのです」と。

出家した後、彼は山に登り日々樹木、草花、水の流れを観察して「この世は無常」という自然の法則を会得しました。こうして三年が過ぎ、何の得る所もないので、むしろ家に帰って家庭の団欒を享

受したほうがよいと思いました。

仏陀はそれを知ると、神通力を使って出家僧の身になり、比丘の所へ行って路を聞くふりをして、彼と一緒に山を降りました。すると突然年取った猿がいるのを見て、出家僧は「おかしいな。この猿は林の中にいなくてはならないのにどうして平地にいるのだろうか？」と聞きました。

比丘は「私はこの猿を三年間も観察していました。猿には妻も子もいるので毎日樹林の中を忙しく、家族のために、山を登ったり降りたりして水や果物を取っていたので、手足がこんなになって

しまったのです。あまりの苦勞を逃れ、休むために山を降りたのでしょう」と言いました。

しばらくして猿がまた山へ戻ったのを見て、出家僧は「おかしいね、山から降りたのになぜまた山に登るのだろうか」と言うと、比丘は「猿は家族のことが忘れられず、恋しくてまた山へ登って行ったのでしょ」と答えました。

比丘が話し終わると、眼前の出家僧は仏陀だと気がつきました。仏陀は出家僧に身を変えられて、心に迷いのできた比丘を済度されたのです。比丘は恥ずかしい思いで、ひれ伏し、仏陀に懺悔しまし

た。

仏陀は「絶え間なく流れる河の水のようには、人の信念もとどまらずにたえず変動します。もしも堅い初発心を持つことができなければ、時はむなしく流れ去り、六道輪廻の中では、この猿と何の違いがあるのでしょうか？」と諭されました。衆生済度の情熱が冷め自修するだけでは、自分の済度だけを求めることになってしまいます。

仏陀はさらに「愛の結びは藤のつるのようなものです」「人心の貪^どの愛はこの藤のつるのようになんじがために身にまとわりつきます。愛欲が尽きず、煩惱

が清められないと、この猿のように樹林の中を行ったり来たりして、苦しみに合います。智慧を以て煩惱の根源を断ち切らなければなりません」と教えられました。

比丘は毎日、花が開きしぼむさま、川の水が逆流しないさまを観察していても、さらに深く考えて、過ぎ去った命は帰らないことを体得していませんでした。そして日々自修にだけ努め、衆生済度の願いを失っていたのです。

比丘は仏陀に感謝して僧団に帰り修行しました。

多くの人は初発心を起こした時は熱

心に精進し、自分と人の済度に情熱を傾けます。しかし発心をいつまでも持ち続けるのは困難で、次々と直面するさまざまな試練に耐えられず、煩惱雑念が日々累積すると続けることができなくなり、最後にはあきらめてただの自修、自分だけの済度になります。

仏陀はこの世にこられて「開、示」を人々に求め、「悟、入」は菩薩道で努め励むことです。《法華経》では人々が心を起こして、大願を立て、菩薩道を通して成仏することと励ましておられます。

人間菩薩として発心立願したからに

は、常に初発心を保ち続けているかと反省する必要があります。

《法華経・化城喻品》の中に、衆人が危険極まりない悪道、曠野無人の恐ろしい所に来ていても、導いてくれる師がいるならば、皆をこの悪い場所から離れさせ、真の宝蔵のある所へ導くとあります。ただし衆人が前途渺茫の道で、ただ休息の所を探しているのなら、前進は望めません。

導師が皆を励まして、険しく長い道を歩いてきたのは、宝を求めるためではありませんか？「それなのになぜその宝を放棄しようとするのですか？」と。そ

して前方に城を出現させて一時休息させました。

疲れきった大衆は前方にある城を見て、安心して休める所があると非常に喜びます。しかし入った後、あまりの快適さについて最初の目標を忘れて、いつまでもこの生活を享受したいと思っっています。

そこで導師は宝物は城と別の所にあつて、この城はたんなる幻で真実ではないので、体力が回復したら、続けて前進しなければならぬと。衆人は幻の城がなくなったのを見て、身を起こし目標に向かって前進しました。

すべての衆生を済度することです。



人々の心に秘めている宝蔵とは、清らかな真如本性のことです。ただ思慮に欠けた心の動きのままに行動する過ちの道は、人生に危険をもたらします。

仏陀は一本の菩提直道を私たちに示されていますから、発心を持ち、篤い信心でひたすら目標に向かって前進しなければなりません。途中で道に迷ったら、ただちにきびすをかせすことが必要です。心の道が真つすぐに通っているな

仏陀はこの譬えを用いて皆をお教えになりました。「煩惱惡道、陰難長遠」ということは、人生の煩惱から離れて、悟りの道に邁進すべきであると。「仏道長遠、久受勤苦、乃可得成」とは、必ず苦勞に耐えて、慇懃に精進してこそ成仏の目標に達するということです。

仏に学ぶ者は、ただ自分だけを済度し、己の生死離脱を求めるものではありません。人の中に入って自らを鍛え人を救いましょう。人の中にこそ宝があるのです。大切なことは堅い意志をもって、人の中に入ってもその習氣に染まらず、法を以て一切の煩惱を取り除いて、広く

らば、自ずと妨げるものはありません。

《普賢菩薩警策文》の中の一句に「是日已過、命亦随滅」とあります。命とは一日過ぎると一日なくなり、一年過ぎると年は一つ減ります。時を把握して正しいことを実行すれば間違いはなく、志を無明煩惱に動揺されてはなりません。皆さんの精進を期待しています。

一から十まで行き届いた教育

◆ 花蓮・張新儀

夏の蒸し暑さもいよいよ厳しくなる七月、慈済大学の国際学生交流キャンプに参加する学生達が、花蓮の中央環境保全センターを訪れリサイクルの体験をしました。解説を担当するのは張新儀先生。空のペットボトルを手にして説明しています。「ペットボトルの回収ですが、資源を回収するだけではなく、それを現代科学

◎文・蔡瑜璇、黄筱哲／訳・黒川章子／撮影・黄筱哲



の技術により毛布に造り換えています。突然被災した人々に送り届け、暖をとってもらうためののです」

額に汗がにじみ続け、長く立っているのはよくないと知りながらも、新儀先生は学生が資源ゴミの分類について質問をするのと丁寧な答え、指導します。「ペットボトルはこのように役に立つこともあります、だからといって大量に使い続けていいわけではなく、量を減らすよう心がけましょう。清浄は源にあり、



という考えが大切なのです」。思いやりの心を伝え続ける先生の熱意は傍聴していた私たちにまで伝わってきて、その教育熱心な姿にとっても感動しました。

今年七十歳になる新儀先生は穏やかで親しみやすい方です。十数年前に瑞穂中学校を退職した後、地球環境が日ごとに破壊され汚染されていることを重く受け止め、環境保全の教育を進めなければならぬと考えて教育の場を教室から環境保全センターに移し、学校をはじめ地域社会にも指導を行ってこられました。環境保全の種をさらに多くの人にまき、芽吹かせているのです。

身をもって環境保全を説く

先生は長い間證嚴上人の願いを胸に抱き続けてきました。「環境保全は腰を屈めて行うだけでなく、身をもって伝えることでもあります」。環境保全の観念が幼い頃から根づいていると、物を大切にすることが身につきからです。センターの中では、

学生が実際に分類する作業を体験し、学び合いました。「回収物はまずきれいに洗浄し、回収に携わった人へ敬意を払いましょう」。参加した小学生の多くが、家に戻った後、積極的に資源回収を行い、家族にも資源の回収と分類そして野菜中心の食事を勧めるのだそうです。教育が浸透し成果をあげているとはまさにこのことです。

先生は招かれればいつでも、できるかぎり予定を合わせて下さるので、ここ数年はセンターだけでなく、多くの学校や地域社会、あるいは環境保全団体でも指導を行っておられます。毎年代の違う人々が集まるのでその度に新しい指導内容を準備し、ポスターにも修正を重ね、適切な指導を行うことで成果をあげてもらいました。先生の行き届いた準備と熱心さをここでも窺い知ることができます。

一回また一回と指導を重ねるごとに、環境保全の重要性に対する先生の思いは強くなり、「心の通った環境保全」をモットーに、「ぜいたくは少なめに、欲は押さえ気味に、学ぶ楽しさを知ろう」と人々に勧めました。キャンペーン活動だけで効果をあげることは限界がありますが、その中で少数でも変わっていく人が現れるこ





とは先生にとって大きな喜びであり、希望となりました。

一生かけて教育という名の樹木と成る

退職後花蓮市に住居を構えた後も、先生は毎月花蓮県の瑞穗へボランティア活動に出かけ、道すがら昔の同僚を訪ねます。今日は私たちも同行させて頂くことになりました。中学校の校内を通り抜けるとその奥に大きな植物園があり、そこはまるで桃源郷を思わせる別世界、地面には芝生が青々と茂り、木々は高くそびえ、色鮮やかな花が模様を織りなす場所でした。新儀先生は私たちにご自身で植えた「五葉松」を見せて下さいました。当初は小さな盆栽だったのが、十三年が経った今では枝も見事に茂っています。先生が長い間教育という畑に種をまき、それがまっすぐ正しく成長している様子が表れているような情景でした。

先生は現在ボランティアとして各地で環境保全のキャンペーンを行っておられま



す。さらに人材の養成に力を尽くし努力を続ける一方で、教育現場でさらに多くの先生方が環境保全の理念を学生に伝えたとしたら、家庭にも広めることができるということに気がつきました。環境保全は口で唱えるだけでは不十分、実行することで初めて人類に幸せと平和をもたらし、きれいな地球を子々孫々と残して行くことにつながるのですから。

学校教師から慈済ボランティアとなった新儀先生が持ち続けている信念、それは「指導は懇切丁寧に、教える喜びを胸に」というものです。今まで一度も「教育」の現場を離れなかったその姿勢は、證嚴上人から頂戴した法号「済諱」と見事に一致しています。四十数年の教育者人生においては様々な人との多くの出会いがあり、数えきれないほどの学生を教えてこられたことでしょう。退職後も休むことなく続ける姿は教えるという愛に満ち溢れ、先生は正に公德の人と称するにふさわしい方でした。



《ボランティアスケッチ》

気持ちを切り替えこだわりを捨てる 李瑾萍の軽やかな歩み

◎文・撮影・楊舜斌／訳・黒川由希

プロフィール：1959年生まれ。2001年慈済委員の認証を受け、慈善家庭訪問への参加を開始。

訪問ケア経歴：14年

訪問ケアの秘訣：家庭訪問の対象者を自分の家族だとみなし、それからもし自分が困難に出合った時に家族にどうしてほしいかを考える。こうすれば、どのように援助すべきかおおよそ見当がつく。

訪問ケアの心得：気持ちの切り替えが大事。物事を複雑化せず、シンプルに捉えれば、自然と恨みつらみを言わなくなる。

八月二十日午後、五十名近くの台北家庭訪問ボランティアと慈済基金会ボランティアが慈済東区連絡所に集まり、各区の連絡所が報告した八仙水上樂園爆発事故被害者の長期サポートプランについて、話し合いを行っていた。

板橋区家庭訪問幹事の李瑾萍は、連絡所に駆けつける直前まで、亜東病院で負傷者と家族に付き添っていた。李瑾萍が付き添う負傷者の一人、小美（仮名）は、全身の熱傷面積が五十%を超え、病院に運ばれた時には意識不明、十日後によりやく意識を取り戻した。小美の両親は折悪しく健康状態が優れず、父親は働くこ

とができなかった。四人の子供を育てる一家に余分な貯蓄はなく、突然の事故で前に一家はなすすべを知らなかった。李瑾萍は聴衆の前で小美一家の直面している苦境をよどみなく報告し、皆の討論を経て、ついにサポートプランが決定した。「この間本当にお疲れ様でした。これは二十日から三十一日までの看護補助費です」。一日後、李瑾萍は祝福金と約束してあった竹の貯金箱を自ら小美の両親に手渡した。ずっと気がかりだったことが多少とも解消され、「この子たちは必ずだんだん良くなっていく」、李瑾萍は心の中でこう祈っていた……。

片足をひきずっても 悠々自在

彰化県溪州郷に生まれた李瑾萍には、三人の兄と三人の姉がいる。李瑾萍は生まれてまもなくポリオウイルスに感染、母親が懸命に病院に連れて行ってくれたおかげで病状は何とか安定したが、右足に麻痺が残った。膝にたびたび痺れが起こり、ふいに足の力が抜けて転んでしまうこともあった。

しかし李瑾萍の両親は彼女に対し特別な扱いをすることはなく、兄や姉がごを背負って川辺へ野草を採りに行くとき

には、彼女も同じように一かご背負って来ては、家のガチョウに与えた。また、洗濯物を干す母の手伝いをしたり、田んぼから帰って来た父が足を洗うための水を汲んで来たりした。そのため、歩く速度は遅くても、李瑾萍は自分が人と違うと感じるようなことは決してなかった。

小学校に上がり、少数の同級生から「びっこ、びっこ」とからかわれた時には、他の同級生と自分を比較し、李瑾萍は自分の不自由な身体を恨みに思うこともあった。ほぼ毎晩、母がマッサージしてくれたが、その痛みを思い出すと李瑾萍は今でも寒気立つ。母からマッサージされる



●古びたアパートへ家庭訪問をする李瑾萍の、階段を上る歩みは覚束ないが、「ゆっくりでもきつと目的地にたどり着ける」と彼女は話す。

時間を減らそうと、彼女はよく、わざと平気な様子を装っていたものだ。

早期の治療と持続的にマッサージを行ったおかげで、李瑾萍の右足の萎縮はそれほど目立たず、中学生の時には自転車で登下校していたほどだ。最初のころには自転車に乗る時、木に寄りかかり、下りる時も木につかまらなければならなかったが、練習を続けるうちに全く一人で

乗り下りができるようになった。

こうした身体の多少の不自由はあったが、李瑾萍は毎日楽しかった。末っ子だったため、家族に特別可愛がられ、同級生とピクニックに行きたいと言うと、バスで行けるところなら両親はどこへでも行かせてくれた。とはいえ車酔いしやすい彼女は、乗るとすぐに吐き続けるため、終点まで乗れたためしはなかったのだが。しかし遊びに行くのが大好きな彼女は毎回友達についていった。あるいは彼女が本当に好きだったのは、出発前、友達との間に生まれる連帯意識だったのかもしれない。

暮らし向きは楽とはいえなかったが、

両親はいつも気前がよく、家のサツマイモの収穫期には、必要な人に持って帰ってもらおうと、玄関前に並べて置いていた。こうした家庭に育った李瑾萍は、自然と両親と同じように客好きで大らかな性格となった。

長期の寄付 震災後のボランティア参加

李瑾萍の学校の成績は優秀で、高校にも合格した。しかし将来、不自由な足で一般企業に勤めるのは難しいだろう、そ

れよりは一芸を身につけ、家で仕事をした方がいいと考えた彼女は、学業をあきらめ、二番目の姉とともに裁縫を学ぶことにした。

偶然「慈済月刊」を読み、深い感銘を受けた李瑾萍は寄付を始め、十五年間定期的な寄付を続けた。裁縫をする時間を利用して、いつもラジオ番組「慈済世界」を聞いていた彼女は、いつか師父（證嚴法師の尊称）に会う機会があったらどんなにいいだろうと考えることもあった。

因縁が巡って来たのかもしれない。ある日、李瑾萍宅の上の階に住む慈済委員の呉貴月は、李瑾萍宅の郵便受けに「慈

済道侶」という雑誌が入っているのを目にすると、興味が湧いて彼女に声をかけた。呉貴月の手元にはちょうど、「慈済列車」の切符二枚があった。こうして李瑾萍と夫の林玉地は、それぞれ子供一人を抱え、一家四人で汽車に乗り花蓮へ向かうことになった。李瑾萍が正式に慈済の大家庭の一員となり、ボランティアを開始したのはその時からである。

ただ拘束されることが嫌いな李瑾萍は、呉貴月から何か役目を引き受けるよう促されると、自分は趣味のボランティア、何かあればお手伝いしますから、といつも言を左右にして断っていた。

そんな彼女を動かしたのは、一九九九年の台湾中部大地震だった。天災のもたらした深刻な被害を目にした李瑾萍は心を痛めるだけでなく、自分の力で何かをしたいと願った。夫とともにボランティア訓練に応募し、また被害救済の資金集

めのためのバザーにも積極的に参加し、近所の人たちを誘ってどら焼きや餃子、臭豆腐、タロイモのカキ氷など売れるものは何でも作って売った。働きすぎて手には水泡ができたが、それでも彼女はうれしかった。買ってくれる人が多ければ多いほど、援助を受けられる人も増えるのだから。

家庭訪問の秘訣

真心をもって付き添うこと

二〇〇一年、李瑾萍は慈済委員の認証を受け、呉貴月に連れられて家庭訪問案件に参加した。家庭訪問を終えた時、「これは家庭訪問状況の記録ノートです。中に雛形がありますから」と言って、呉貴月は一冊のノートを彼女に手渡した。李瑾萍は見よう見まねで訪問した家庭の深刻な現状、経済状況などを書き記した。家庭訪問との長い縁はここから始まったが、その時の家庭訪問対象者の家族であった鄭宝珠こそ、李瑾萍が初めて引き入

れたボランティアでもある。

鄭宝珠の夫は口腔がんの末期で、がんが発見された時、三人の子供たちはみなまだ就学中だった。長女は家庭の負担を減らそうと休学して家計のために働いた。李瑾萍がその家庭への訪問を始めた当初、鄭宝珠の夫にはいつも会えなかった。実は彼はトイレの中に隠れ、家庭訪問に来た人々の人となりを観察していたのだ。ボランティアの誠意が伝わったのか、何度か家庭訪問を続けるうち、鄭宝珠の夫はついにボランティアの前に姿を現した。

その後鄭宝珠の夫は入院し、鄭宝珠は

ほとんど一日中、病院で夫に付き添った。ある台風の日、家で食事の支度をしていた李瑾萍は、鄭宝珠の子供たちの食事が心配になり、暴風雨も構わず雨具を着てオートバイに乗り、ビスケットと熱々の温麺を持って鄭宝珠の子供たちに届けに行った。

治療の甲斐なく夫が亡くなると、宝珠は一日中泣き暮らした。そんな彼女の自宅を李瑾萍はほとんど毎日訪ねては彼女を慰め、夜半まで付き添うことも珍しくなかった。こうして連れ添うこと十数年、宝珠は慈済のボランティア養成訓練に参加し、慈済委員の認証を受けた。子供た



ちもみな無事就職し、今では母の日になると祝いの電話をかけてくる。

二〇〇五年八月、李瑾萍は慈済の活動を終え、寄付金を集金するため樹林へ向かう途上、通りから飛び出してきた小型バスに右側からぶつかられ、バイクから転げ落ちる時に右ひざを地面にぶつけた。急いで起き上がって状況を確認しようとしたが、全く立ち上がることができ

●もし自分が事故にあったら、どうしてほしいだろう？ 李瑾萍はこうした態度で傷ついた人々をサポートし、援助と励ましを与える。

●慈済ボランティアがケア対象家庭の住まいを清掃する。掃除を終えたボランティアたちが祝福の歌を合唱すると、その家庭の家族は李瑾萍を抱きしめ、感動して涙を流した。（撮影／張嫦娥）

なかった。

彼女は自分で救急車を呼び、病院へ向かう救急車の中でも、今夜の活動をどうしようかと考えていた。手術室に入る直前まで、彼女は仕事の引継ぎのための電話をかけていた。

検査の結果はひざの粉碎骨折、手術後丸々八カ月間ギブスで固定しなければならなかった。ベッドに横たわりながら、静

養のため重要な役目はおりて、趣味のボランティアになろうと李瑾萍は考えた。ところが結果は静養どころではなく、より一層慈済の活動に没頭することになった。当時、陳阿招姉姉が自分に連絡役を果たさせてくれたことに李瑾萍は感謝している。毎日慈済の活動を行っていると、自分が怪我人であることも忘れてしまった。

補助用具に頼らなくてすむようになるまでには二年近くの時間がかかったが、この間も彼女は家庭訪問を続けていた。杖を突き、ゆっくりゆっくりと階段を登るのは楽とはいえなくても、彼女の心は



楽しく疲れを感じなかった。

爆発事故に心を痛め 他人の身になって考える

二〇一五年六月二十七日に発生した新北市八仙水上樂園爆発事故。李瑾萍は慈済ボランティアが亜東病院の被害者を見舞う活動のコーディネーターを務めていた。入院患者のリストを手に、三日間駆け回ってもなお何人かの家族とは連絡がつかず、お見舞い金を渡すことができなかった。李瑾萍は、家庭訪問ボランティアの劉恵如とともに再び病院へ行ってみ

ることにした。

熱傷病室の入り口に立ち、涙にくれる家族たちの行き交う様を目にしながら、二人の心も動揺した。そんな中、一人の中年の男性が李瑾萍に向かい、携帯電話を忘れたので貸してほしいと声をかけてきた。実はその男性はある鄰（行政区の一つ）の鄰長で、里長と待ち合わせて負傷した里民を見舞おうとしていた。彼らが見舞おうとしていたその人こそ、李瑾萍が探し続けていた人だった。

李瑾萍はチャンスを見逃さず、彼らに慈済のお見舞い金の由縁について詳しく説明し、その負傷者の家族に慈済人の訪問

を受け入れてもらえるかどうか尋ねてもらうことにした。その後しばらく反応がなかったが、里長が伝言をその家族に伝えてくれたおかげでその家族も慈済ボランティアの訪問に同意し、李瑾萍はすぐにお見舞い金を持って病院に駆けつけた。家族はその時まで集中治療室の中におり、彼女は黙って面会時間の終わるのを待った。病床の息子について語り始めると、涙をこらえきれない家族に対し、李瑾萍は多くの言葉をかけることはなかった。こうした状況で必要なのはただ付き添うこと、言葉は要らないと李瑾萍は知っていたからだ。



毎朝、李瑾萍は被害者家族への菜食弁当の予約人数を確認し、急いで慈済炊事部に連絡、こうしてボランティアが食事時に弁当を配達してくる。台風の日にはパンを準備する。被害者家族が余計なことに悩まされず、付き添いに専念できるよう配慮する。

●明るい性格の李瑾萍は、誰に対しても何に対しても笑顔だ。「さあさあさあ、早く入ってきて！」。病院を訪問するとき、ボランティア仲間にこう声をかけていた。

◎文・釋徳仇／訳・心榮

試練や困難を堪える

このようにして一日一日と信頼関係を築き上げてゆくうちに、はじめは婉曲にサポートを断っていた家族も、ボランティアとその他の家族とのふれ合いを見て、次第にボランティアに声をかけてくるようになった。最後には李瑾萍が即座に家族の要望を知り、対応できるようにと、被害者家族専用のソーシャルネットワークのグループに彼女を招待した人もいる。

帰宅すると、李瑾萍はその日の家族とのふれ合いをノートに記録する。自分の言葉、家族の反応を丁寧な字で書きとめ、自分の言葉に至らぬ点はなかったか何度

も思い返す。父がいつも言っていた言葉を彼女は感謝を持って口にする。「他人のことは、自分のこと」。一人ひとりの家庭訪問の対象者を自分の家族と見なすならば、どうして真心をこめずにいられるだろう。

（慈濟月刊五八六期より）

人、事、物に誠実な心で対応し、敬虔な心で仏法に精進しよう。

まちがった生き方をやめ
正しい道に戻る

アメリカ・カリフォルニア州で発生した森林の火災は、すでに隣のオルゴン州とワシントン州にも広がり火の勢は抑えられない状態になったようです。



朝会の時、上人は、「地球における森林とは、人間の身体に例えれば肺のようにとっても大切な器官です。地球の肺が再三にわたって傷つけられていけば、大地は健康な状態ではいられないでしょう」

「人間の身体も新陳代謝がよく、血液の循環もよければ健康ですが、そうでなければ病気が生じやすくなります。地球も地水火風といった四大に不調和を来したために災難を生じたのです。世の中が平穏になるためには、まずは人々の心をしずめ自分の行為を自制することが大切です」

中国・天津の港で多くの死傷者をもたらした大爆発によって、空气中に有毒の化学物質が飛散した状況は恐ろしいものです。また、タイのバンコク市内にある四面仏寺に爆弾が仕掛けられ、大勢の死傷者が出たため人々の間に不安が募りました。「世の中では常に善と悪が綱引きをしているようなものです。平穏な社会に

なるため、日頃の心の持ち方を変えなければならぬのです」と上人はお話しになりました。

「心が無明にとらわれて、真理を悟ることができないのは、あたかも人が長い夜に夢を見ているかのようです。天災や人禍を減らすため、人々が素直な心を養って深く戒を守ることが望みます」

精舎で毎朝三時五十分の起床時間に板をたたいてみなを起したり、また、朝のお務めの時間を知らせるため鐘や鼓を鳴らしたりするのは、人々が時間の大切さを心にとどめるよう喚起するためです。そして心して仏法を聞けば、自ずと心は穏やかになり、不安を感じたり焦ったりすることもなくなります。「皆が根気よく勤勉に習った仏法を、迷っている人々の心に展転して伝えてゆくよう願っています」



一念を転化し

日本の慈済ボランティアは月に二回、ホームレスに温かい食事を提供しています。七月のその日は気温が三十八度の猛暑でした。日ごろクーラーの効いた家で過ごしているボランティアたちは、汗まみれになって尽くしていましたが、ホームレスにわずかでも食事が提供できることを嬉しく思い、心にぬくもりを感じました。

「内湖慈済環境保全ステーションのボランティアの中に、富裕層に属するITの実業家があります。かつてとても豊かな生活をしていましたが、慈済を知ってからは毎朝早起きして仏法を聞くようになり、そして、自ら専門の分野を生かして環境保全ステーションを先端技術の展示場所に化しました。そして、環境保全の理念について、見学にきた人々に伝え知らせたのです」と上人は、

台湾での例をあげました。「習気を是正するのはさほどむずかしいことではなく、一念を転化することによって成し得ることができます。かつては裕福な暮らしを追求するばかりでしたが、今は、仏法を胸にして熱意を持った奉仕の人生に変わりました。炎天下で行われた奉仕活動さえも歓喜の心と共に幸福感を覚えたのです」

世の中のあちらこちらで災難が発生する昨今、自らとらわれない心を護って、警戒心を高めなければなりません。「人や物事に誠実な心で、仏法を敬虔な心で精進するように。また世の中のさまざまな苦難を受け入れ、常に衆生のために力を尽くせば、自然と仏法の喜びを十分に感じとることができるのです」とみなを励まされました。

（慈済月刊五八六期より）

慈濟大事記十一月

..... 訳・済運

11・01	大愛感恩科技公司は4日間、中国の第8回義烏国際森博会に参加し、浙江省義烏の国際博覧会会場にエコリサイクル製品を展示してエコロジ―、温暖化対策、環境保全の概念を訴えた。また、義烏テレビ局と義烏商業新聞のインタビューを受け、人々が環境保全に対する認識を高め、エコライフを実践するよう呼びかけた。
-------	--

11・02	中華民国人工関節学会、中華民国整形外科学会、台湾脊椎外科学会、台湾整形外科創傷学会など4つの学会の会員が初めて合同で模擬手術に参加した。2日から6日まで慈済大学で29の課程に分かれて行われ、8名の「無言の良師（献体者）」を通じて、より新しい複雑な整形外科手術を学んだ。7日には感恩追悼式典が行われた。今回は全国51の病院から175人の整形外科医が一堂に会し、医療技術について意見を交わした。
11・04	慈済基金会の甘肅省白銀市靖遠県第2期村落移転計画の一環として、五合郷白塔慈済大愛村が9月に完成した。この日住宅300戸の抽選会が行われ、台湾慈済基金会の王端正副総執行長が代表で寄贈する一方、張旭晨市長から贈られた感謝の旗を受領した。

1 1 ・ 1 1	1 1 ・ 1 0
◎日本岩手県の達増拓也知事と大槌町の平野公三町長一行3人が大愛テレビ局を参観すると共に、證嚴法師を訪ね、東日本大震災での支援に対する感謝状を贈呈した。 ◎慈済フィリピン支部は11日、ヌエヴァ・エシハ州のガパン市、カバナトゥアン市、ガバルトン町、ラウル町などで台風被災者2749世帯に米と生活必需品の配付を行った。また、18日にはボンガボン町でパロマリア村の貧困家庭45世帯に米を配付する他、14の村の116世帯の農民に米とタマネギの種子を配付する予定である。	マレーシア、センビラン州タマンペルタンは8日に豪雨に見舞われ、災害が起きた。慈済セレンバン支部のボランティアは調査後、10日、タニンピン慈済ボランティアの協力の下に52世帯の被災者に慰問金を届けた。

1 1 ・ 0 8	1 1 ・ 0 7
◎新北市衛生局による第4回医療公益賞がこの日、侯友宜副市长から表彰された。15人の受賞者のうち、台北慈済病院の徐榮源副院长と陳舜鼎漢方医が「医療貢献賞」、教育部の黄俊仁主任と泌尿器科の蔡曜州医師が「教育研究賞」を受賞した。 ◎アメリカ、テキサス州アイブン市が10月31日竜巻に襲われた。慈済テキサス支部は同日現地赤十字社に緊急災害支援センターを立ち上げ、被災者41世帯に物資購入用デビットカードと毛布を配付した。	慈済がフィリピンで台風ハイエン被災者のために建設してきた仮設住宅の二期目527戸が、レイト省オーモック市で落成した。この日引き渡し式典が行われ、約2000人が入居した。

11・13	◎慈済大学の児童発育学科と家庭教育学科の教師と学生が「びっくり！ Lalaban は子供のもの」と題した遠隔地教育計画を始めた。9月にネットを通じて15台のカメラを募り、花蓮県豊浜郷新社小学校の生徒を連れてアミ族集落文化を映像に納める活動を行い、11月13日、豊浜郷クバラン文化展示センターでその成果を発表した。また、16日から20日まで慈済大学大愛芸文センターでも展示される。 ◎第20回アジアテレビジョンアワードの入賞発表が行われ、慈済伝播人文志業基金会大愛テレビ局のドラマ番組「小人物大英雄」のエピソード「火の中を去る人」の脚本家兼監督である王陳保が監督賞を受賞した。
11・14	花蓮慈済病院の陳英和名誉院長は強直性脊椎炎手術を受けた楊曉東と陳団治をマカオに訪問した。彼らの生活への適応性を聞き取ると共に、

11・18	慈済伝播人文志業基金会は「第19回兩岸ニュース報道賞」で3つの賞を受賞した。「經典雜誌」の趙中麒と黃書緯が「中国線上」と題した作品で雑誌報道賞、劉子正と黃世澤が〈兩岸文明分野——兩岸社会に対する觀察〉報道で二次元撮影賞の佳作、大愛テレビ局記者の吳志怡、陳彥珊、李俊威、林国新、吳帛勳は「漁工移跡」と題した報道番組でテレビニュース報道賞の佳作を受賞した。
11・20	慈済基金会は、花蓮黎明養護ホームが古くなったマイクロバスを取り替えるのに合わせて、新しい中型バスを寄贈し、同時に131枚の防寒衣を提供した。

慈濟

2015 年 12 月 17 日 発行・228 号

中華郵政台北誌字第 909 號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan



訳・済運 絵・蔡志忠／彩色・盧扶
《清らかな智慧》より

発行人 釋證嚴
発行所 慈濟基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路 2 号
編集 慈濟日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈濟基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)

父が亡くなって四十九日間は家族全員が菜食をしていました。弟は胃腸病の持病があったのですが、四十九日の菜食で治ってしまいました。その上、兄弟姉妹の仲が以前よりもよくなりました。家族の間に数十年に亘って横たわっていた憎しみが消え、今では円満になっています。

貴方の愛の大きさに伴い、家族もそれだけの愛があるのです。求めるものがあれば必ず争いが起きます。他人にばかり要求すれば、自分自身に底無しな苦悩をもたらします。